

医師不足で地域医療崩壊の危機に直面している東北地方の寒村で、一度はくも膜下出血で生死の境をさまよいながらも、診察を続ける開業医がいる。岩手県大船渡市、滝田医院の滝田有院長(49)。患者の大半が高血圧の高齢者で、脳や心臓疾患のリスクを抱えている。滝田院長は「医師を続けられるのは天命だと思う。自分の経験を生かし、患者の生活習慣を改善させたい」と情熱を燃やす。

(伊藤真呂武、写真も)

大病克服 地域医療守る

三陸海岸に面した岩手県大船渡市末崎町地区。オフシーズンの冬本番を迎え、静まりかえる港町にあって、滝田医院の待合室は日々、老若男女の話し声が絶えない。

滝田院長の復職から1年半が過ぎた。自身の体調や患者の待ち時間などを考慮し予約制にしているが、それでも1日に約60人を診なければならぬ。

厚生労働省の平成18年の統計で、岩手県はくも膜下出血を含む脳卒中の死亡率が、男女とも全国ワースト1位だった。高血圧が発症リスクを高めるとされ、滝田医院の患者の多くもその予備軍といえる。だから、生活指導に時間を割く。

「妻に止められているので、退院してからみそ汁を一度も飲んでいません」

「退院後は血圧を下げる薬を2種類飲んでいましたが、食事を改善し、体重を落としたら1種類になりました。薬を1種類減らすことを目標にしましょう」

経験者の言葉だけに、患者は思わず身を乗り出して耳を傾けるという。

平成20年1月9日。午前中の診察を終え、趣味のロードバイクで病院近くの上り坂を走っていたとき、頭部に2度鈍器で殴られたような衝撃

を受け、その場に倒れ込んだ。はつきりと意識を取り戻したのは、2日後。仙台市内の病院のベッドに横たわっていた。

「医者の不養生で、まともに血圧を測ったことがなかった。実は高血圧だった」。しかも、昭和2年に滝田医院を開業した祖父の巖さんも、くも膜下出血で死亡していた。くも膜下出血を引き起こす動脈瘤が遺伝するのは常識だった。

東北地方を直撃した医師不足の波が、自身に降りかかったことも災いした。

地元の中核病院である県立大船渡病院で、19年4月から循環器科の常勤医が3人から1人に減り、滝田医院に患者が流れてきた。1日の患者数が一気に約30人も増え、救急患者の対応でも神経をすり減らした。発症直前の年末年始には、急な往診も重なっていた。

早期発見とその後の適切な処置のおかげで、幸い手足にまひは残らなかったが、入院から3、4日後、弟と息子に「自信がなくなった。病院を閉める」と漏らしていた。くも膜下出血を発症すれば50%が死亡し、社会復帰の可能性が25%しかないことを知っていたからだ。

「脳卒中は、大地震が個人の身に起きるようなもの。自分の築いた土

岩手・大船渡 滝田有院長 経験を生かして診察に還元

フォーカス

「台が崩れていく感じがした」

ただ、入院している間、母校の東北大病院が週2日、医師を派遣し、地域医療を支えてくれていた。「やめるわけにはいかない。患者を見捨てることはできない」と悟った。20年3月に退院。真っ先に個人用の自動血圧計を購入し、1日に何度も血圧を測ることが習慣になった。

同年6月5日の復帰初日。患者約10人を診察した。しばらくは、復帰を聞きつけ、診察日ではないのに顔をのぞきに來る患者が後を絶たなかった。使命感がわき上がった。

「元気に仕事ができる喜び、自分の診療所で患者を診られる幸せが身に染みた。開業医は派手に短くではなく、長く続けることが何より大事なのだ」

滝田医院の目と鼻の先にあるJR細浦駅で働く村上良子さん(72)は、滝田院長が倒れた日、自宅がある仙台市から駆けつけた院長の妻から愛犬を預かった縁もあり、院長の体調が人ごととは思えない。

滝田院長が復帰してからの1年半、駅に向かう途中に滝田医院が開いているのを確認しないと安心できないという。院長自身の検診などで臨時休業になるが、「閉まっているだけで、また倒れたのではないかと、ドキドキしてしまう」。

臼井クニエさん(87)は幼少期、滝田院長の祖父、巖さんの診察を受けた記憶が残ってい

自身の体験も踏まえ、高血圧の患者には生活改善を提案する滝田院長
—岩手県大船渡市



患者「無理をしないで」

る。14年に釜石市から生まれ故郷の大船渡市に戻った際、一時閉院していた滝田医院を孫の院長が再開すると聞き、ほっとしたという。それだけに院長が病に倒れたときの動揺は大きかった。

「院長先生しか頼る人がいないのに、どうしよう」。近くの神社に駆け込み「助けてください」と祈らずにはいられなかった。院長の患者で、19年9月に亡くなった夫の神棚にも手を合わせ続けた。

復帰後の月1回の診察日、患者の臼井さんから院長にこう声が掛けられる。「あまり無理しないで」